

分からな〜い

内藤 真理子

わがクラブの今回の読書会は、直木賞受賞作の『鷲と雪』だった。作者は北村薫、1949年生まれ、私とは同年代だ。作者が六十歳の時の受賞作である。

視点人物は花村英子、女子学習院の生徒。本の帯には、

「良家の令嬢と女性運転手が時代を見つめ謎に挑む」とある。

本の帯から紐解くと……。

令嬢は資産家の娘の花村英子であり、女性運転手は英子専属の運転手でベッキ―こと別宮みつ子さん。彼女はフォードを運転し、教養があり、英子の相談事に的確に答えを出してくれ文武両道、何でもできるスーパーレディである。

この作品は、出席者の一人、Nさんの情報によると『ベッキ―さん』シリーズ九作品中の最後の一冊で、彼女は、アメリカの大学で学んだという記述もあるとのこと。

帯の「時代を見つめ」るのは、英子で、良家の子女の視線である。ご学友は伯爵の、子爵のと、やんごとなき人々で、その方々を通して住む家があり、行事があり、生活がある。やたら豪華な背景に心ときめく。

花村家では英子のお兄様が国文科専攻の大学生でハイネの詩を読み、それにシユーベルトが曲を付けたレコードを聞いて、それについて兄妹で話をしている。私の暮らしの中では考えられない光景だ。

ハイネの詩は、森鷗外の訳で『分身』。

兄「分身はドイツ語でドッペルゲンガーというのだよ」。

妹「ああ、もう一人の自分、ね？」

兄「昔から、ドッペルゲンガーを見るのは縁起の悪いこととされているのだよ。言い伝えでは死の前兆にもなるそうだ」。

この会話をキーワードに話が進む。

令嬢たちは一週間かけて関西に修学旅行に行く。中にはこの機会に自分専用の写真機を買う者がいる。家同士のつながりで卒業を前に婚約をしている者も……。

そして旅行のために買ったこのカメラでいたずらを企て、ドッペルゲンガーを出現させる。ベッキ―さんはこの出来事の謎に果敢に挑んで、事の成り行きを解

き明かしていき、友達のいたずらであったことを突き止める。

題名の「鷺」は、能の出し物である。そして雪は……。

いよいよ帯の後半「時代を見つめ謎に挑む」を紐解こう。

英子の想い人は陸軍少尉だ。

英子は風邪をひいて寝ている。夢の中に能舞台で『鷺』を舞っている彼、想い人を見た。その日、彼の所属する隊が移動するので、彼が本を送ってくれた。

お札に時計を送ろうと、時計店にかけた電話に出たのは彼だった。英子は間違い電話をかけたのだ。そこは首相官邸だった。

「あなたの声が聞けて良かった。武運長久を祈って下さい」。の言葉を残して電話は切れた。

昭和十一年二月二十六日、雪の日だった。

「時代を見つめ謎に挑む」が帯の言葉。

私も含めて読書会の全員が雪の日の出来事は「二・二・六事件」だと分かった。だが、あまりに突飛過ぎて、これはドツペルゲンガー？
分からな〜い。